

(おかしい……合コンって、絶対こんなじゃない筈……)

「へ～、璃子ちゃん合コン来るの初めてなんだぁ。緊張してるの？カワイイね～」

「璃子ちゃん何か食べたいモノある？ 何でも好きなの頼んでいいよ。俺達の奢りだから」

「今なに飲んでんの？ ああ、甘い系の系だったらコッチのカクテルも美味しいよ。料理のついでに頼んどこうか」

「緊張しなくても大丈夫だよ、璃子ちゃん。俺等みんな紳士だから女の子にはメチャクチャ優しくするし。だから今日は気楽に合コン楽しもうね？」

「は……はい……よ、よろしく……お願いします……」

四人の男性が私一人に話しかけてくる。

男性四人に対して女性側は私一人しかいない中、人生で初めての合コンが始まってしまった。

初めての合コンがこんなおかしい事になるなんて想像もしてなかった。

元々私は人数合わせの為に誘われただけなのに、お店に来てみれば私を誘った女の子三人は皆都合が悪くなり来られなくなると、男性の一人からつい先程教えられた。

そして普通ならそこで解散になるだろうに、何故かそのまま女一人、男四人で合コンする事になってしまった。場所はオシャレなダイニングバーの完全個室。五人で使

うにはだいぶ広い部屋のソファの真ん中に座り身体を硬くする。

私の両隣には男性二人が座っていて逃げ道を塞がれた気分だった。

右に座っているのは一ノ瀬さん、左に座っているのは橘さん、U字型のソファの両サイドそれぞれに高坂さんと鳴宮さんが座っている。

四人とも私と同じ大学生らしいけど、こういう場には慣れた感じでごちない私に対しても笑顔でスマートに接してくる。

顔もそれぞれ違ったタイプのイケメンだし、スタイルもいいし、服もオシャレだし、通ってる大学は某有名私立と聞いてるし、そんなきらびやかな男性達に囲まれ地味で普通な私は萎縮するしかなかった。

「や～しかし璃子ちゃんが来てくれてホントよかったよ～。じゃなきゃ男四人でむさ苦しい飲み会になるところだったからさ」

「そーそー。やっぱ可愛い女の子一人いてくれるだけで部屋の空気が全然違うよね～」

「え……あ……や、そんな……」

それに四人は話の最中に度々私の事を可愛いと言ってきて、お世辞とはわかってるけどこんなカッコいい人達に言われるのはドキドキして心臓に悪かった。

言われる度に動悸が激しくなり狼狽えて言葉に詰まる。

(こ、こういうの、合コンでは普通なんだろうな……お世辞なのに一々動揺しちゃって、うう……恥ずかしい……)

合コンのノリに全く付いていけない自分が恥ずかしくてそれを誤魔化すようにお酒のグラスに口を付けた。頼んだ料理はどれも美味しくてお酒も美味しかった。一ノ瀬さんの知り合いの店だと聞き知り合いまでオシャレなんだなと感心する。

あまり聞き馴染みのないオシャレな料理を美味しく摘んでいると、不意に高坂さんが「そろそろ合コンらしくゲームでもしようか」と言ってきた。

「ゲームですか……？」

「お、いいね。それじゃ合コン初心者の璃子ちゃんがいる事だし、ここは定番の王様ゲームでもする？」

「王様ゲーム……」

「あ、璃子ちゃん王様ゲームって知ってる？ やった事ある？」

「あ……し、知ってはいます。けど、やった事はないです……」

「そうなんだ。じゃ初王様ゲームだね。ちなみに王様の命令は絶対だから、ちゃんと命令に従うようにね？」

高坂さんの提案に鳴宮さん、一ノ瀬さん、橘さんも賛成して私は碌に口を挟めないまま王様ゲームする事が決まった。

最後の橘さんの笑顔で言ってきた言葉にどうしてか心臓がドキりと跳ねて、そんな自分の反応に胸を押さえながら首を傾げた。

くじを引いて五人で声を揃えて「王様だーれだ」と言った後、恐る恐る自分の右手を上げる。

「あ……あの……私です……」

「うわ〜璃子ちゃんか〜。どうかお手柔らかに頼むよ〜」

「えっと……じゃあこの料理を1番の人が3番の人にアーンして食べさせてあげてください」

「ゲッ、3番って俺じゃん。1番じゃなく王様がアーンするって命令に変えない？」

「うるせえ。オラ1番様がアーンしてやっからとっとと口開けろ」

私の命令に従って鳴宮さんがスプーンを持ち高坂さんにアーンと食べさせる。二人ともスゴく嫌そうな顔してて、申し訳ないけど少し笑ってしまった。

(王様ゲーム……楽しいかも……)

人に何かを命令するなんて初めての経験で、私の言葉に従う男性達の姿になんだかイケナイ快感を覚えてしまったみたいだった。

勿論王様になるのは私だけじゃなく他の人もなったりし

て、変顔するとか何番を褒め称えるとかマッサージするとか、指令が出れば嫌そうな顔しながらもみんな楽しそうに従っている。

（そういえば私、まだ何も命令されてないな……そろそろ呼ばれちゃうかも……）

王様は番号を指定して命令するので、自分が持ってる番号を呼ばれるかどうかは完全に運だった。

まだ一度も指名されてないのは私だけなので、そろそろ当たるかもと、どんな命令されるだろうと胸をドキドキさせて自分の番号を確認する。

「俺が王様で〜す！ え〜と、どうしよっかな……そんなじゃ 2 番のヤツが 4 番に〜」

（あっ、4 番って私だ……っ）

王様になった橘さんが 4 番と言った瞬間に私の心臓はドキンッと大きく飛び跳ねた。

「キスする！」

「へ……？」

そして続けて彼の口から発せられた命令に耳を疑う。

「あ〜、まじか。2 番って俺だわ。璃子ちゃんは？」

「ふえッ！？ あ、わ、わ、私は……っ」

右隣に座る一ノ瀬さんが私に聞いてくる。彼が 2 番という事は、私は一ノ瀬さんとキスしなければならないとい

う事だろうか。そう考えて彼の質問に答えられずにいると、王様である橘さんが左隣から私のくじの番号を覗き込んで「ああ」と声を上げた。

「璃子ちゃんが4番なんだね。じゃあ璃子ちゃんと一ノ瀬がキスって事だ〜」

「マジかよ、一ノ瀬超ラッキーじゃん」

「クソ〜、何でこういう時に璃子ちゃんと当たるんだよ」

「えっ、あ、あ、あの……っ」

「あれ？　なんだ、早く言ってくればいいのに。璃子ちゃんとのキスなら大歓迎だよ〜」

一ノ瀬さんが先程までの渋い表情を一転させその整った顔をにこやかな笑顔に変える。

（え？　え？　ほ、ほんとにキスするの……？？）

「あ、あの、私……」

「璃子ちゃん、さっき俺が言った事覚えてる？　王様の命令は絶対、だよ♡」

私がどうにか断れないかと考えているのを察したかのように、橘さんはそう私に囁いた。

そうこうしている間にも一ノ瀬さんの顔が近づいてくる。

もう逃げられないと悟って私は覚悟を決めギュッと目を瞑った。

（キ、キスなんて一瞬だろうし、チョンてくっつけたらそれで終わりだろうし、た、たいした事じゃ……）

「……っんんんんんんんん！??」

軽くくっつけるだけで終わるだろうと思っていたキスは、私の想像を遥かに超えて深く唇を重ねられた。

しかも、驚いて開いてしまった口の隙間から一ノ瀬さんの舌がニユリと中に入ってくる。

「んんん……っっ♡ ふっ、ふっ、んふっ♡ んううううう……っっ♡」

舌がグチュリ♡グチュリ♡と口の中を掻き回した。その舌の動きに縮こまっていた私の舌が絡め取られ、お互いのソレが淫らな音を立てて絡み合う。

(く、苦しい……っ、こ、こんな……いやらしいキスするなんて……っっ♡)

キスした事くらいはあるけど、ここまでいやらしいキスは生まれて初めてだった。苦しさに反射的に身体が逃げようとするけど、一ノ瀬さんに強く抱きしめられ動けなくされる。

更にはキスも一層深くなりますます呼吸を奪われてしまう。

「んんうううう……っっ♡♡」

舌がじゅるじゅると吸われカプカプと甘噛みされる。微かに痺れる舌にまた一ノ瀬さんの舌が絡みついて、にゅるにゅるとお互いの舌がいやらしく交じり合う。

そうしている内に口の中に唾液が溜まってきて、無意識

にゴクリ…と飲み込んだ。これは多分、自分のだけじゃなく一ノ瀬さんの唾液も混ざってて、そう気付いてしまうとカアア…っ♡とキスしながら身体が熱くなった。

「は~~~~~っ♡ は~~~~~っ♡ は~~~~~っ♡ は~~~~~っ♡」

「おつかれ璃子ちゃん。しっかり命令達成できたね」  
「どう？ 王様ゲーム楽しいでしょ？ これからもっと楽しくなるからね」

「それじゃ、続き始めようか？♡」  
ソファの背にぐったりともたれかかる私に、一ノ瀬さんとのキスを見守っていた三人が笑顔で言ってきた。その平然とした様子にこれはきっと彼等にとっては普通の事なのだろうと理解する。

「は……はい い……♡♡」  
なので私はそう返事をするしかなかった。

けれどここから、ただ楽しかった筈の王様ゲームは私が想像してたものとは全く違う様相になっていった。

「ハイじゃあ俺が王様ね〜。命令です。1番と2番でお互いの乳首当てゲームをしてください♡」



「っっ！？♡」

（ま、また私……っっ！？♡）

高坂さんの命令に1番を引いた私は硬直した。ついさっき命令でいやらしいキスをしたばかりなのに、またちょっとエッチな命令に当たってしまい身体を震わせる。

その私の斜め前で鳴宮さんが「俺2番だわ」と手を上げた。

「あ、わ、私が……1番……です……」

そう小さく言うと鳴宮さんは嬉々として一ノ瀬さんと席を代わり私の隣にやって来た。

「じゃ、先に璃子ちゃんが俺の乳首当てていいよ♡ 何処にあるかわかるかな～？♡」

堂々と私に向けて胸を張る鳴宮さんの姿からは恥ずかしさが微塵も感じられず、こんな事で恥ずかしがってる私がおかしいのかもと段々思えてきた。

おずおずと両手を伸ばし、ちょん、と乳首があると予想した場所を軽く人差し指で突く。

それに鳴宮さんが笑って「ざんね～ん」と言った。

「俺の乳首はもうちょい下だよ。惜しかったね～。って事で次は俺の番ね！ さあ、璃子ちゃんの乳首はドコかな～？♡」

「っ、あ、あ、あの、ま、まっ」

「ココだっ！！」

クニユリ♡と私の乳首が指に押し潰された。

「ッッ！♡」

鳴宮さんの勢いよく突き出された左右の人差し指が、私の乳首に両方ともしっかりと当たっていた。

しかも勢いがよすぎて乳首を押すと同時に私の E カップの胸に指が目一杯めり込んでしまっている。

「どう？ 当たった？」

鳴宮さんが無邪気に聞きながら指をグリグリ♡と動かした。

「ンン……ッッ♡♡ っ……あ、当たり、です……っ♡」

ブラジャーの中で乳首が擦れるのを感じて声が漏れそうになりつつ、恥ずかさをジッと堪えて質問に答える。

「イエー、乳首当ては俺の勝ちだね♡ 璃子ちゃんの乳首ゲット～！♡」

「ひっ♡ ひんん……っっ♡♡」

鳴宮さんは嬉しそうに笑い、そう言いながら最後にグリグリ♡グニグニ♡たっぷり乳首に押し込んだ後ようやく指を離れた。

「うゝ……っっ……♡♡」

こんな所を誰かに触られるなんて私にとっては初めてなんだけど、私以外の四人は相変わらず平然としていて、それを見て私はジン…♡ジン…♡痺れる乳首をさりげなく押さえ何事もなかったようにゲームを続けた。

中略

「は~~~~♡♡ は~~~~♡♡ は~~~~♡♡ は  
~~~~♡♡」

「ハイ、璃子ちゃん。次のくじ引いて～」

「ふあ……♡♡ は、はい……♡♡」

鳴宮さんにくじの箱を差し出され、プルプル震えながら細長い紙の先を摘んだ。

（お、王様になれば……命令……♡♡ されなくてすむから……♡♡ 王様にさえなれば……っ♡♡）

頭の中ではどうか王様になれますようにと、そればかりを願い恐々とくじの中身を確認する。

（ああ……♡♡）

落胆する私を余所に今回の王様が決まる。王様になった橘さんは私の思いなど知らず笑顔で口を開いた。

「そうだな～、さっきから乳首系のお題ばっか続いてるし、今回は違う系のにしようかな～」

その言葉に少しだけホッとした。

それなら万が一また番号が当たっても乳首を弄られる事はないと、ツキ…♡ツキ…♡と甘い痛みを訴えプックリ腫れている突起に目を逸らしつつそう考える。

「え～、それじゃ、3番の人が2番の……」

2番のくじを引いた私はビクッと肩が震えた。

（だ、大丈夫……っ、こ、今度は……乳首をいじられる訳じゃないから……っ♡♡）

そう思って、ジンジン…♡ジンジン…♡切なく疼く突起を落ち着かせる。

鳴宮さんは笑顔のまま続けてこうやってきた。

「チンポをイじるで！」

「ッッ！？？♡♡」

「璃子ちゃん何番？ あっ、2番か〜。俺3番だから、ちょっと璃子ちゃんのチンポイジらせてもらうね？♡」  
「ッッッ！！？？♡♡ 〜〜まッ、待ってください……  
っっ♡♡ わ、私……っ、〜〜おゝ、おちんちんなんか……  
♡♡ ひゃうっ！？」

女の私におちんちんなんか無いと、3番のくじを持つ一ノ瀬さんに必死で訴える。この命令は無効だと、そう言おうとしたところで私の身体がヒョイと一ノ瀬さんに持ち上げられた。

今度は一ノ瀬さんの膝の上に乗せられ、後ろから低い声で耳に囁かれる。

「璃子ちゃんにも立派なチンポ付いてんじゃん。ホラココに、ちっちゃい璃子ちゃんのクリチンポが♡」

「ひうゝうゝうゝッッッ！？♡♡」

一ノ瀬さんはスカートの裾から右手を入れ、そして下着の上からクニゅ♡と、丁度クリトリスがある場所を指で躊躇なく突っついた。

「恥ずかしいだろうけど命令だから我慢してね？ お詫びに璃子ちゃんのクリチンポいっぱい気持ちよくしてあげるからね？♡」

「ひんゝんゝっ♡♡ やゝ♡ やゝ♡ やゝめゝ……はうゝうゝうゝうゝうゝっ♡♡♡」

カシカシカシカシカシカシカシ……♡♡♡

一ノ瀬さんの爪が、下着越しにクリトリスに当たった。  
「やゝだ♡ やゝだ♡ やゝだ♡ っあゝあゝあゝあゝあゝっ♡  
♡♡」

左手でしっかりと身体を抱きしめられ身動きを封じられ、右手の指がカシカシ♡とスカートの中で動いているのをクリトリスで目一杯感じる。

「璃子ちゃんのパンツ結構濡れてんね。乳首イジめられるのそんなに気持ちよかったんだ」

「やゝあゝあゝあゝあゝあゝっ♡♡♡」

不意に一ノ瀬さんの指がパンツのクロッチをニチュ♡ニチュ♡と撫でてきた。

ずっと乳首を弄られていた所為でソコはもうぐっちょりと濡れてしまっていて、それを一ノ瀬さんに知られると同時にハッキリと言葉にされたまらない羞恥に襲われる。

指がおまんこに食い込んでグチュリ♡グチュリ♡と漏れ出てくる愛液を拡げる。

「乳首でコレだったらクリチンポ弄ったらもっとおまんこびしょ濡れになるだろうね♡ 璃子ちゃんのおまんこグッチョグチョになるくらい、おチンポたっぷり弄ってあげるからね♡」

「やゝだあゝあゝっ♡♡ やゝ…♡♡ あゝあゝあゝっ♡♡  
あゝッ♡あゝッ♡あゝッ♡あゝッ♡ ひっひぐうゝうゝうゝ  
う……っ♡♡♡」